第柒号摘抄 十二ノ下

2051 2052 2053 2054 2055 2056 2057 2058

ひさかたのあまのはらゆくや七日の月はとく入を白まゆみひくかたちにみたてゝ読る也　これもいへること事なく面白き　抄

こゝのゆふへ降来る雨をかいのしつくとみなしゝ也　このゆふへにかゝる

からちとりもいへるの宴のちるらんことのゝ名を

類聚六このふねみとも早榜をとくとく

とふも仙ちやうてさあまの川やうせ

類聚六きみかまつと

2051
ひさかたのあまのはらゆきてやゐるとしらまゆみ
天原往射跡白檀
ひきてかくせる月ひとをとこ
挽而隠在月人壮子

2052
このゆふへふりくるあめはひこほしの
此夕零来雨者男星之
はやこくふねのかいのちるかも
早滂船之賀伊乃散鴨

2053
あまの川やそせきりあふひこほしの
天漢八十瀬霧合男星之
ときまつふねはいまこくらしも
時待船今滂良之

2054
かせふきて川なみたちぬひくふねに
風吹而河浪起引船丹
わたりもきませよはふけぬまに
渡裳来夜不降間尓

2055
あまの川とほきわたりはなけれとも
天河遠渡者無友
きみかふなてはとしにこそまて
公之舟出者年尓社候

和こゝのことはしこよひわたりはてゝことよむ時

まれは七月七日のよひのまちわたりや八十瀬は瀬のおほきさ

風のきこえし河浪立　七夕のあふせをいへる也

ひこほし川をわたる　下にも此歌をさしはさむ

ゆきかよふも君にまちて待年中まちくらし一夜あふせの心ならん

調録あまはとこしへに年のわたりのことをよめり

あまれたまとはよめり

2056
あまの川うちはしわたせいもかいへち
天河打橋渡妹之家路
やますかよはんときまたすとも
不止通時不待友

打橋は板をうちかけ渡す

渡の事を云　祇園天川にあり

打橋を読りし也地儀

のうちわたりの年中をまつにて

2057
月かさねわかおもふいもにあふよひは
月累吾思妹會夜者
このなぬかよつきこせぬかも
今之七夕續巨勢奴鴨

かさねつゝまちて読る也

すてに七日のあふ夜をかさねつゝ

2058
としによそふわかふねこかん
年丹装吾舟滂
あまの川かせはふくともなみたつなゆめ
天河風者吹友浪立勿忌

たつなゆめはたつなといふ事也

万葉白　卅六

2059 2060 2061 2062 2063 2064 2065 2066

よそへたるかとみゆこれよるむすめ 暑記云東陸路ハ虹乃ことしゆきこえ
と通ス君とハ牽牛と織女のこと也牛女ハ河を隔てぬめあへんハ絶えと
月日をへてあひて 西日ニ此あひてこそ河をわたり一年あふをまき
とかもおもへるに河すがら速ねともかく跡く心ちをうり七夕の嫁娶よ吉
月良日とえらる事なりまじきにありて八人是れありけよ此にてよまむ

2067
河おれりもわたるせ
心明く

あまのかはわたるせふかみふねうけて
さしくるきみかかちのおときこゆ

天漢渡瀬深弥泛船而棹来君之檝之音所聞

2068
あまのはらふりさけ
霧立渡るとハいへり
君ハ来ぬらしと思ひ

あまのはらふりさけみれはあまのかは
きりたちわたるきみはきぬらし

天原振放見者天漢霧立渡公者来良志

2069
河おれりしせことに
渡りくる君を幸(サイハヒ)あらせて
凡此の歌なれどもなを
人是れ有る事そよめり

あまのかはせことにぬさをたてまつる
こころはきみをさきくきませと

天漢瀬毎幣奉情者君乎幸来座跡

2070
類聚ニ本に作り
よ向るハ君をさちさ

ひさかたのあまのかはつにふねうけて

久方之天河津尓舟泛而

てらてまちかせらとと
ひ本の名俵かたまや

きみまつよらはあけすもあらぬか

君待夜等者不明毛有寐鹿

2071
ひさかたのかはつにて
河ゆすもあらぬか
すもかはりしこと

あまのかはあしぬれわたりきみかても
いまたまかねはよのふけぬらく

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久

2072
河おれりしと足沾れ
まねハ未枕といふ
て深き夜り

わたりもりふねわたせをとよふこゑの
いたらねはかもかちのおとせぬ

渡守船渡世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不為

2073
わたりもりわたし舟を
渡世をわたせと呼ふ声
きもてかのゆきとも

まけなかくかはにむかひてありしそて
こよひまかんとおもへるかよさ

真氣長河向立有之袖今夜巻跡念之吉沙

2074
まけなくかみとよ
嘆息して河に向ひ立
て袖を振る袖をこゆハ枕
かせんとこよひが心よさと

あまのかはわたるせことにおもひつつ
こしくもしるしあへらくおもへは

天漢渡湍毎思乍来之雲知師逢有久念者

2075
あまれりしわたる跳

ひとさへやみつかすあらん 一云見

人左倍也見不継将有

作有良武摩牛之嬬喚舟之
迫附往来辛
てあらんいこころのつまよも
ちりにさくひく
天漢瀬半早鴨鳥珠之
ながれてせをたちやみつるうるわし
夜者闌尓乍不令奉牛
まもなけりてあらねひこころ
渡わたり舟和早渡一年尓
わたりもりわねやまでにひとりさを
二遍往来君尓有加久尓
ふたへひとりふみてしまくよ
玉葛不絶物可良佐保者
年之渡尓有者直一夜耳
うつつわりなたひとものを

戀日者氣長物乎今夜
ある日はけなげものをこよひ
今宵
ことしむへしやもさよのふけ
織女之今夜相余婆如常
よおそくもあひあふつつしみ
明日半阻而年者将長
あすをへだてらいねのけん
天漢棚橋渡織女之
あまのかはたなはしわたすおり
伊渡尤牟尓棚橋渡
いとまさんうしこおもわれや
天漢河門八十有何尓可
あまのかはとやそありなにかも
君之三船平吾待将居
きみこむねをわれまちをらん
秋風乃吹西日徙天漢
あきかせのふきにしひうつりあまのかは
瀬尓出立待登告将許
せにいでたちまつとつけこそ

天漢去年之渡湍有二家里
あまのがわこぞのわたりせにはありにけるかも

君将来道乃不知久
きみこむみちのしらくも

天漢湍瀬尓白浪雖高
あまのがわせにしらなみはたかくとも

渡来沼待者苦三
わたりこぬまつはくるしみ

垂牛之嬬喚舟之引網乃
たるうしのつまよぶふねのひきあみの

将絶跡君平吾念勿國
たえんとこきみをわがおもわなくに

渡守舟出為将出今夜耳
わたりもりふねだしせんこよひのみ

相見而後者不相物可毛
あいみてのちはあわぬものかも

吾隠有機掉無而渡守宇
わがかくるはたおりしなくてわたりもり

舟将待八方須臾者有待
ふねまちやかたしばしはありまてど

乾坤之初時従天漢
あめつちのはじめのときゆあまのがわ

射向而一年丗四遍不遭
いむかいてひととせみたびあわずして

妻戀尓物念人天漢
つまこいにものおもうひとあまのがわ

安乃川原乃有通丗出出乃渡丗
やすのかわらのあるかよいでいでのわたり

具穂船乃船丗裳舳丗裳
ともほふねのふなでもよへでも

繁抜旗竿本葉裏
しげくぬきたるはたさおもとはうら

具曲丗秋風乃吹来夕丗天
ともまげてあきかぜのふきくるゆうべあまの

白浪凌落沸速湍
しらなみしのぎおちたぎりはやきせ

川
かわ

舟を立て旗よ吹嵐
也おきそふもへまも
舟よそひする舳艫に
旗をとりもしめ
そもとせくせか
乙女子のくせさ
る葉旗の嵐り
梅小吹まつわれうま
のくつはれくせを
しるやうかやる
おう舟のそひのそ
大船にかしきる
日にかそとそいん
枕なき船のこ
そはれころ おか
み号のはまる枕

渉りてわ多乃妻手抗師
大船乃思憑而榜来
等六其夫乃子我荒珠乃
年緒長思来之戀
将盡七月之日
夕者吾毛悲焉
反歌
伯紐解易之天人乃
妻問夕叙吾裳将レ偲
彦星乃川瀬渡左小舟乃

得行而将泊河津石所レ思

こそいかくことを
結てそ書の末七
夕乃年中そいて
恋ひこそいの河瀬うま立んと
こまふきひもとき高麗錦也こま紐ゆふまてい寝かてに
ろこふ男小壁そてい寝乃衾をきる こそ多小四緒うち付
ふを紐とそ云 祇曰高麗の寝を七夕の紐ふすきるうち紐
とそいんさめこそうきき紐の心重衾ふすもいもうれ紐
ひこうし乃川瀬を
渡ふ舟さ小時こそ七夕の舟こ八定めこそこひの心ゆるは
ふ小漂こ小時こそ
乃ふの里こそて
天川をりて天地用
爾より天にいる心
おもひそ多のこのおもひ乃
天にハ天帝の行末
故おもひそのてそ

天地跡別之時従久方乃
天験常区大王
乃原今璞
妹尓相時
天之河
月累而
天之
侯跡立待尓
いもかこまをまつこ

吾衣手尓秋風之吹者　反歌
わが衣手に秋風の吹く
立坐多士伎手不知村
立ちても坐てもたしきてを知らず村
肝心不堪
肝心解衣思
きもの心をとくと思ひ
亂而何時跡吾待今夜
乱れてかいつと我が待つ今夜
此川行長有得鴨
この川の行く長くあり得かも

解衣思
解き衣を思ひ
相時片待跡久方乃
逢ふ時片待つと久方の
天之漢原尓月叙經來
天の漢原に月ぞ経にける

詠花歌　三十四首

柿本朝臣人麻呂

挿志鹿之心相念秋芽子之
さしかの心相念ふ秋萩の
鍾礼零冊落僧惜毛
散れ零り冊落ち僧しく惜も
夕去野邊秋芽子赤
夕去れば野邊の秋萩赤
露枯待難尓
露枯れ待ち難きに

作者未詳

眞菅原名引秋風吹毎
眞菅原名引く秋風吹く毎
阿太乃大野之芽子花散
阿太の大野の萩の花散る

いもうとなきをとふらふ　牽牛の織女にあふ時をまつ
この心をよめる　七月をとこおんなあふ時をまつ
詠花　秋の草なとをよめる
萩の鹿乃ほとゝきす
萩に鹿の心あひもよほし
萩の本枝もまろひ
萩の本枝もまろばれて
花咲なとよめる
枯やすけされ秋
枯やすけされ秋
のさうをも移ろ
のさうをも移ろ
ひぬるそみも思
ひぬるそみも思
まくすくなくあるく
まくすくなくあるく

雁鳴之來喧 年日及 見作 將有
屈ねんかさるらん 風ふきて
北 芽子原 尓 雨勿 零 根
これをきりそうあめなみふりそね
奥 山尓 住云 男鹿之 初夜 不去
おくやまにすむてふさをしかの
妻問 芽子乃 散 牀毛
つまどふはぎのちるらくおしも
白露乃 置巻 惜 秋芽子乎
しらつゆのおきまくおしみ秋はぎを
折 耳手折 而置 哉 枯
おるのみおきてやかるらん
秋田苅 借廬之 宿 尓 穂經及
あきたかる仮廬のやどに穂はへて
咲有 秋 芽子 雖見 不飽
さける秋はぎ見れどあかぬかも
吾衣 摺有者 不在 高 松之
わがきぬをすれるまつの
野邊行之 者 芽子之 摺類 曽
のへゆきしはぎのすれるそも

此暮 秋風吹奴 白露尓
このゆふべあき風ふきぬ白露尓
芽子之 明日 将咲
はぎのあすさかんそ
秋風 冷 成 驚 而
秋風のすずしくなれば驚きて
去來 於野 行 奈 芽子 花 見尓
いざ野にゆかな萩の花見に
朝 景 朝露 負 咲 雖云
あさかげに露おひて咲くといへど
暮陰 社 益
ゆふかげこそまさめ
春 去者 霞 隠 不所見有 師
はるさればかすみかくれてみえずあり
秋 芽子 咲 而 将挿頭
秋はぎさきてかざしてん

まさきくあれて　また春萩の咲きにほふ
をいつしかと　ねてさまし　袖中物の忘れ難
く　秋さらば　必ず来まさむ　と　しかれ
こそ　千引の石を　置きまねも　せめ　
後れ居て　恋ひつつあらずは　追ひ及かむ
を　道の隈廻の　草枕　旅の丸寝の　苦しけ
くも　あるかも　
沙額田野　八牟奴乃野　
さねかづらの　丸寝　
沙額田乃野邊乃　秋芽子　時有者
さねつらの　丸寝
今盛　折而将挿頭　いまさかりなり　おりてかざさむ
事更　衣者不着　佳人部為　
ことさらに　衣はすらじ　をみなへし
咲野之　芽子尓伏敷　日而将居
さく野のに　しきてとらさむ
秋風者　急之吹来　芽子花　
秋風は　はやくな吹きそ　をみなへし
落巻惜　三　競
ちらまく惜し　みきほふ　競ふがごとく
我屋前之芽子之　若未長　秋風之
わが屋前の　萩の若葉を　秋風の
吹南時尓将開跡思乎
吹かむ時に　咲かむと思ふを
平花之未平　秋跡者将言
をばなの　すすきを　秋とは言はむ
公之使乃手折来有
君が使の　手折りもてきたる
玉棒之　此秋芽子者雖見
玉棒の　この秋萩は　見れども
不飽鹿裳
飽かぬかも
吾屋前尓開有秋芽子常有者
わが屋前に　咲ける秋萩　常にあらば
我待人尓令見猿物乎
我が待つ人に　見せましものを
手折而人乎将待　手折すすき　名乎可良思
手折りて人を待つ　名にしからし
植之覚久出見者
植えしと覚ゆ　出見れば
屋前之早芽子咲尓家類香聞
屋前の早萩　咲きにけるかも

てしすゑふうへしも 氣象章蒙拾山哥注云まとしすゑのことゝいふも
やまとことばにゝ又わさ花とそり 貨物云山哥第二首古哥よ
てしすゑふうへしもてること哥ぜり 後のいひなり今和しくく
云へきうゑうへしもてもしすゑもとゝ古花をおれるもこゝ
發句ともいはれすへきうゑうへしきこゝろ(ゑ)あけうゑうと
ふ説しまゝいふなり(ゑ)うへしきこゝろ重集ニ葉集
乃外古語りとりてゑもよくく莫嘗園隣 新何本 樂ニ浪
若菜長乃哥乃ちこゝろゑふくわうの哥 且又美本乃名乃のうち
ゝもしおもへいんや氣象卿ゑもの古人とゝなる古哥をもて
たきうゑへきと私乃哥をそゝゑものそよゝすへきいあそ(ゑ)ゑ
臆説をゑするゑ條乃ゝきするもおそらく他見ことゝ葉乃そ
とを生をれいこゝ終をも古人さき作りは人の好ひ乃うへ作
わりやとうへ 吾屋外介殖生有秋草子平
我家の萩を我家
作らばこゝろとゑよ 誰標刺 吾介 丘野知
うて人のおこゝろへ れうこゝめゝそすわゝゑもこゝせそ

手取者袖并冊覆羨人部師
もゝこれい神さへゝみわゝゑもこゝ
此白露介散巻 惜
この三ゝにゝゆゑもこゝろ
白露介荒争金手咲草子
三ゝにゝゆゑこゝろうわてさゝ萩
散 惜 兼 雨莫零根
ちゝへおゝゝんあめるみわうね
蜩嫣等行相乃速縮平荊時
をゑめゝふゆゑさゝいのわせをゝるこゑさよ
或来下草子花咲
ありにゝゝゝもゑさ花ゑゝゝ
神物曰ゆゑさゝあひ乃わせを乃ゝをとゝ乃ゝをわせよゑ子にけゝる更万葉の
所よゆゑさゝいひ乃坂の薩麗よ開けゝる坂の花をゑんせんこもゝ
うゑへ心はあうすへ重山子をめゝふとゝ約会ゝいそん
祝詞へ約お坂紀伊或立田ゝ 朝霧之棚引小野之草子花
ゝうさゑさゝ乃ゝゑゝいへ

小野従余心野心
乃心順
こいたくいふことのみそ
もし許心順
いきてにあらてしき
萩を折て心をなくみ
恵さでこゝろもとめ
みぬさうかふかりんもき
らすいてしき萩る
ま八恵をまさんと
たゝやいたや
あきくせ八日こゝ
イ果せ八我八同
ますおの心
萩を餝よこゝ
人を恵やう八大夫

今我散濫 来ヽ厭 仝
戀之久者 形見 仝 為與登 吾背子我
こいたくいふことのみそ 吾背子我
殖之秋 茅子 花咲 仝 家里
うへしあきそさきなゝくり
秋 茅子 戀 不ヽ盡 跡雖ヽ念
思恵也 安多良 思 又将相 八方
もろもろの
秋風者 日異ひゝ吹 奴 高圓之
あきかせを日こゝにまねくもの
野邊之秋茅子 散 惜裳
のへ丸秋をきちりおもし
大丈之 心 者無 而秋 茅子之
ますらおのこゝろ八奈 積而有南
戀
こいなのこゝろもしなつくそなん
吾待之秋 雖ヽ然
わかまち
秋者来 奴
秋をきかゝ

茅子之花 曽毛 来ヽ開 家類
そもまたをるへくしまつさくる
欲見
吾待戀之秋茅子者
枝毛思美三荷花開 二家里
えたもたわゝにはなさかりく
春日野之茅子 落 者朝東
かすかのゝちまきなへ乱こちの
風仝 副 而 此間仝落 来振
くせくりそくこちかこね
秋茅子者於ヽ雁 不ヽ鳴常言有者香
秋をまたき雁くりあり
一云言有可聞 音平
こゑをきくらしいなゝ妹ま
散 去流
ちりぬる
秋去者鳴ヽ雁 仝親 跡殖 之茅子
秋さらはいとゝ仝見んとうへしそき
露霜 頁而 散 来 毳
はゆちりくるもの

詠雁歌 三首

秋風介山跡部イでぴ越雁鳴者

いつきくぜよし山どぺこゆる雁かりがねの
射矢遠放イさる雲隠筒
いやこととさくりてまつかくれつつ

明闇之朝霧隠こもり鳴而去
おけくれのいでき書くれしあまさてゆく

雁者言戀於妹告社
かりがねはこひいもにけこそ

吾屋介鳴之雁哭雲上介
わがやどよあまぐもの上ゆ
今夜喧成國方可聞
こよひなくなりくにへもとな

遊群ノ歌十首

尤小牡鹿之妻問時介月平吉三
さをしかのつまとふときにつきよしき
切木四之辺所聞今時来等霜
ころもでさむくなりにけるかも

天雲之外雁鳴從聞之
あまくものよそにかりがねきくなへに
薄衾霜零此夜者
すすきぶすまもしもふりにけむかも

一云いでますくは益介戀許曽増焉
いでますくはいやこひまさりけり

秋田吾苅婆可能過去者
秋田のかりばかりねてゆけば
雁之喧所聞冬方設而
かりがねきこゆふゆのかたまけて

葦邊在萩之葉尤夜藝秋風之
あしべなるはぎのはふさやきあきかぜの
吹来苗册雁鳴渡
ふきくるなへにかりがねきこゆ

一云秋風介音所聞四来霜
あきかぜのおとをきくなへにしもふりぬ

押照難波宮江之葦邊者
おしてるなにはのみやえのあしべには
雁宿有疑霜零介
かりねすらしもゆきふりにつつ

秋風介山飛越雁鳴之
あきかぜをやまとびこえかりがねの
聲遠離イさる雲隱良志
こゑとほざかりくもがくるしも
朝介往雁之鳴音者如吾
あさゆきかりがねのなくこゑは
物念可毛聲之悲
ものおもふらしこゑのかなしき
多頭我鳴乃今朝鳴奈倍介雁鳴者
たづがなのけさなくなへにかりがねは
何處指香雲隱良哉
いづこさしてかくもかくるらむ
野干玉之夜渡雁者蟋蟀
ぬばたまのよわたるかりは
幾夜子歷而鹿已名乎告
いくよをへてかしかのなをつぐる

詠鹿鳴歌十六首

作者未詳

北月之秋朝開介霧隱
このころのあきのあさけにきりがくれ
妻呼雄鹿之音亮聞乍
つまよぶをしかのこゑのさやけきを
龍男壯鹿之妻慕鳴音之
たつをしかのつまこふるなくこゑの
將至極寒芽子原
いたくさむかもはぎがはら
於君戀裡觸居者敷野之
きみにこひうらにふれをればしきのの
秋芽子凌龍壯鹿鳴堂
あきはぎしのぎたつをしかぞなく

璞年之經往者阿跡念哉登
あらたまのとしのへゆけばあとおもふと
夜渡吾手間人哉誰
よわたるわれをとふひとやたれ

雁来　萩者散　跡　左小牡鹿之
鳴　咸　音　毛　裡　觸　丹　来
秋　萩子之　戀　衆　不盡　者左牡　鹿之
聲　伊　續　戀　詩増　益　焉
山　邊　尓　射　去　徃　遊　薩　雄者雖二大有
山　尓　文　野　尓　文　抄小牡鹿　鳴　毋
足日木　笑　山從　来　世波左小鹿　之
妻　呼　音　闇　益　物　平
山　邊庭　薩　雄乃林　良比　恐　跡
小牡　鹿　鳴　咸　妻　之眼平　欲　焉
秋　萩之　散　去　見　聲
妻　戀　為良思　棹　牡鹿　鳴　毋
山　遠　左乎　京　尓余之有　者　狭小牡鹿之
妻　呼　音　者之　毛　有　香

雁来の萩の散り敷く跡を左小牡鹿の鳴く咸の音を聞きつつ秋萩の衆に盛りて者左牡鹿の聲伊續ぎ戀ひ詩増し益焉

山邊尓射去徃遊薩雄者雖二大有れど

山尓文野尓文抄小牡鹿鳴毋

足日木笑山從来世波左小鹿之

妻呼音闇益物平

山邊庭薩雄乃林良比恐跡

小牡鹿鳴咸妻之眼平欲焉

秋萩之散去見

妻戀為良思棹牡鹿鳴毋

山遠左乎京尓余之有者狭小牡鹿之

妻呼音者之毛有香

雁来の萩の散り敷く跡を左小牡鹿の鳴く咸の音を聞きつつ秋萩の衆に盛りて者左牡鹿の聲伊續ぎ戀ひ詩増し益焉

山邊尓射去徃遊薩雄者雖二大有れど

山尓文野尓文抄小牡鹿鳴毋

足日木笑山從来世波左小鹿之

妻呼音闇益物平

山邊庭薩雄乃林良比恐跡

小牡鹿鳴咸妻之眼平欲焉

秋萩之散去見

妻戀為良思棹牡鹿鳴毋

山遠左乎京尓余之有者狭小牡鹿之

妻呼音者之毛有香

雁来の萩の散り敷く跡を左小牡鹿の鳴く咸の音を聞きつつ秋萩の衆に盛りて者左牡鹿の聲伊續ぎ戀ひ詩増し益焉

山邊尓射去徃遊薩雄者雖二大有れど

山尓文野尓文抄小牡鹿鳴毋

足日木笑山從来世波左小鹿之

妻呼音闇益物平

山邊庭薩雄乃林良比恐跡

小牡鹿鳴咸妻之眼平欲焉

秋萩之散去見

妻戀為良思棹牡鹿鳴毋

山遠左乎京尓余之有者狭小牡鹿之

妻呼音者之毛有香

雁来の萩の散り敷く跡を左小牡鹿の鳴く咸の音を聞きつつ秋萩の衆に盛りて者左牡鹿の聲伊續ぎ戀ひ詩増し益焉

山邊尓射去徃遊薩雄者雖二大有れど

山尓文野尓文抄小牡鹿鳴毋

足日木笑山從来世波左小鹿之

妻呼音闇益物平

山邊庭薩雄乃林良比恐跡

小牡鹿鳴咸妻之眼平欲焉

秋萩之散去見

妻戀為良思棹牡鹿鳴毋

山遠左乎京尓余之有者狭小牡鹿之

妻呼音者之毛有香

秋萩子之歌一首 去者左牡鹿者

萩の花 咲きのををしみ 秋風に 靡く牡鹿の 妻呼ぶ声を 聞くがともしさ

和備鳴 将為名不真者之 焉

わがために 来鳴く雁は 実もがも 言づてやらむ 妹が目を見む

秋萩之咲有野邊者左小牡鹿首

秋萩の 咲きたる野辺の 朝露に 濡れつつ来鳴く 鹿の初声

露平別作嬬問四家類

秋萩を 妻問ふ鹿の 声聞けば 山田の引板 鳴らすなり

奈何牡鹿之和備鳴為成蓋毛

秋萩の 散りのまがひに 呼び立つる 小牡鹿の声を 聞くがともしさ

秋野之芽子也藝将落

秋萩の 咲きたる野辺は 行き行きて 君を来ませと 立ちて居て待つ

秋芽子之開有野邊左小牡鹿者

萩の花 咲きたる野辺の 初露の 消ぬべく我は 思ほゆるかも

落巻惜見鳴去物乎

秋萩の 散りのまがひに 呼び立つる 小牡鹿の声を 聞くがともしさ

豆日木乃山之跡陰介鳴鹿之

秋萩の 散りのまがひに 呼び立つる 小牡鹿の声を 聞くがともしさ

聲聞為八方山田守酢兒

秋萩の 散りのまがひに 呼び立つる 小牡鹿の声を 聞くがともしさ

詠蟬歌一首 作者未詳

暮影来鳴日暁幾許

ひぐらしの 来鳴く夕べと 朝戸出の 君を来ませと 門に立ちて待つ

毎日聞跡不足音可聞

ひぐらしの 来鳴く毎に 聞けど飽かず 声の乏しき 秋にしあらねば

詠蟋蟀歌一首 作者未詳

秋風之寒吹来倍吾屋前之

浅茅之本介蟋蟀鳴毛

秋風の 寒く吹くなへ 我が宿の 浅茅が本に こほろぎ鳴くも

影草乃生有屋外之暮陰尒
かけ草乃おひしけるやとのゆふかけよ
鳴蟋蟀者雖閨可聞
まくまもなくすだくとありぬへし
庭草尒村雨落而蟋蟀
ふるさとにむしのなきわたるころ
鳴音聞者秋付尒家里
まくまもなくきけはあきつきぬらし
詠蝦蟆歌五首 作者未詳
三吉野乃石本不避
諾文鳴来河平湧出水
むへもなきこりかなさやる水
神名火之山下動去水
みなひの山のもみちはいまし
川津鳴成秋登将去鳥屋
かはつなくなり秋といふらん
草枕宿尒物念吾聞者
草まくらかりねのやとにわれきけは
夕片設而鳴川津可聞
ゆふかたまけてなくなるかはつかも
瀬呼速見落當知足白浪尒
せをはやみおちたきつしらなみよ
川津鳴宗里朝夕而
かはつなくさとのあさゆふにして
上瀬尒河津妻呼暮去者
かみつせにかはつまよふゆふされは
衣手寒三妻将枕跡香
ころもてさむみつまやまくらん
詠鳥歌二首 作者未詳
妹手平取古名之池之浪の間従
いもしらなみのまゆりこの池乃
鳥音異鳴秋過良之
とりのねことなくあきすきぬらし

よりうりと云ふ事ハ名寄ニ出ス（取名池）但
先生手枕取古池也ニ八雲名寄乃説古実ニ
可用ニ山名寄ニ八山寺ニ有ものゝおもてハ秋
秋野之草花我未
鳴古百鳥
秋のゝハおくるゝまゝに
聞虫の音ハ片糸吾妹
物ゝ山路ときくらん
あはれなりける
詠露歌九首 作者未詳
冷茅子冊置白露朝朝
おきそふる庭の秋風
珠斗曽見流置白露
暮立之雨落毎
うつろふ秋の
秀者春日野之尾花之上
乃白露
萩の上の露
玉ゝ念

芒花一ト叢の陰
ゆふされハ
秋茅子之枝毛十尾冊露霜置
寒毛時者成尓家類可開
白露與秋茅子者戀亂
別事難吾情可固
吾屋戸之麻花押靡置露尓
手觸吾妹兒落
白露平取者可消
露尓而茅子之遊
秋田苅借廬平作吾ヶ居者
衣手置尓家留

日來之秋風寒
このころの秋風さむし茅子之花
令レ散白露置尓來下
きりすも鳴ゆふべさむしろ秋田苅苫手搗奈利白露增
あきさらばとりてうつそも白露の置尓穗田無跡告尓來良心
きてまつとつげこきぬ
一云告尓來良思母

詠山歌一首 作者未詳

春者毛要夏者綠冊紅
春かすみ夏者緑之
綠色尓賀秋散巻惜山可聞
みまきほしゆるあきはやまじも

詠黃葉歌四十一首

柿本朝臣人麻呂

妻隱イこもる矢野神山露霜尓
つまごもる矢野の神山露霜尓
介賓比始朝露尓漬始秋山
ふかゆかそめてもみつやまに
鏤礼莫零在渡金
にしきなかりそ散わたるもの

九月乃鏤礼乃雨冊作者未詳治遍
ながつきの時雨のあめよもぬきとほり
春日之山者色付冊来
かすがの山そいろづきにける

雁鳴之寒朝開之露有之
かりがねのさむきあさけのつゆありと
春日山平令賞物者
よみもやまをとよみもするそ
北日之暁露冊吾屋前之
このころのあかつきつゆ
芽子乃下葉者色付尓家里
はぎのしたはもきつきにけり
雁鳴者今者来鳴沼吾待之
かりがねはいまはきなきぬ
黄葉早継待者辛苦冊
もみちはやたにけまてい
秋山乎謹人縣勿忘西
あきやまをゆめ人なかれわすれめや
其黄葉乃所思君
そもみちはのおもふきみ
大坂平吾越来者二上尓
おほさかをわれこえくれは
黄葉流志具礼零作
もみちはのなかるしぐれふりつ

秋去者置白露尓吾門乃
あきされはおくしらつゆにわかかとの
浅茅何浦葉色付尓家里
あさちうらはいろつきにけり
妹之袖巻来乃山之朝露尓
いもかそてまきこしやまのあさつゆに
仁寶布黄葉之散巻惜裳
にほふもみちのちらまくおしも
黄葉之丹穂日者繁然
もみちはのにほひはしけく
妻梨木平手折可佐寒
つまなしのきひらてをりかささん
露霜乃寒夕之秋風冊
つゆしものさむきゆふへのあきかせに
黄葉尓来毛妻梨之木渚
もみちはにきもつまなしのきなき
吾門之浅茅色就吉魚張能
わかかとのあさちいろつくよしもはりの
浪紫乃野之黄葉散良勲
なみむらさきののもみちはちらまくに

雁之鳴聞鶴 奈倍尓高松之
かすのねをきこえぬるかも
野上之草曽色付尓家留
のうへのくさそいろづきにける
吾背子我白細衣
わかせこかしろたへころもも
應染毛黄變山可聞
にほはめもきなりやまもか
秋風之日異ひらふく吹者水茎能
あきかぜのひにけにふけは水莖の
岡之木葉毛色付尓家里
をかのこのはもいろづきにけり
雁鳴乃来鳴之共韓衣
かりかねのきなきしともに韓衣
裁田山者黄始有
たつたやまはきなりめそめり
雁之鳴聲聞苗荷明日従者
かりかねのこゑきくなへにあすよりは
借香能山者黄始南
かすかのやまはきなりめそめん

四具礼能雨無間之零者真木葉毛
しくれのあめまなくしふれは真木の葉も
争不勝而色付尓家里
あらそひかねていろづきにけり
灼然四具礼乃雨者零加國
いちしろくしくれのあめはふるかくに
大城山者色付尓家里
おほきやまはいろつきにけり
大城山者在筑前御笠郡之大野山頂
風吹者黄葉散作小雲
かせふけはきなりのはちりてくもに
吾松原清在莫國
わかまつはらきよくあるなくに
物念座而今日見者
ものおもひをりてけふみれは
春日山者色就付尓家里
かすかやまはいろつきにけり

2200 九月 白露 夏而足 因木乃
2201 山之將黃葉見幕下吉
2202 妹許跡馬鞍置而射駒山
2203 擊越来者紅葉散筒
黃葉爲時尓成良之月人
楓枝乃色付是者
2204 黒木と異にて霜者置良之高松
野山司之色付見者
歌林良義尓八里ことにとそてけるそいまし

2204 乃心しそことを君尓曰八けくさし黒木と杯の野山つてきのふつてとそて
里とけふ雨やさくんとし雨尓おほすれ八そゆふひやゆふ
秋風之日異吹者露重
2205 けきくものひかるまみ八けゆふりみ
芽子之下葉者色付
2206 てやれもこそいろけさるまり
秋芽子乃下葉赤荒玉乃
2207 あきそやれもこそちぬのつゆの
月之歴去者風イ寺の疾そやき鴨
2208 けさ乃へゆけそかせをいつみ
真十鏡見名淵山者今日鴨
白露置而黃葉將散
吾屋戸之浅茅色付吉魚張之
わりやとの浅茅色付吉魚張之
夏身之上尓四具礼零疑
雁鳴之寒鳴從水茎之
わりねのさひしくもあるかも

岡乃葛葉者色付仝来
秋萩之下葉乃黄葉於花継而
時過去歟者後将恋鴨
明日香河黄葉流葛木
山之木葉者今之散疑
妹之紐解登結而奥
今許曽黄葉始而看家礼

雁鳴之喧従春日有
三笠山者色付毛家里
比者之五更露仝吾屋戸乃
秋之芽子原色付仝家里
夕去者雁之越往龍田山
四具礼仝競いろひ色付仝家里
左夜深而四具礼加雲秋芽子之

本葉之黄葉落巻惜

もみちばのちりゆくをしむ

故郷之始黄葉平手折以

ふるさとのそめもみちそをておりもて

今日曽吾来不見人之為

けふわれくるこぬひとのため

君之家乃黄葉早落

きみがいへのもみちはやくちりぬめり

四具礼乃雨介乗沾良之母

しくれのあめにぬれよくあさやまの

一年二遍不行秋山平

ひとせにふたへはゆかぬあきやまを

情介不飽過之鶴鴨

こころあかすすぎてつるかも

詠氷田歌 三首

作者未詳

足曳之山田佃子不秀友

あしひきのやまだつくるこがてらも

縄延谷延與守登知金

しめはへてたにはへよとそうるねは

尤小牡鹿之妻嗅山之岳邊在

もとをさをしかのつまかぐやまのへにあり

早田者不苅乎霜者雖零吾田

わさだはかりかもしもはふるとも

わさだ

題乃水田介恨乃少

しるしのみつたにうらみのすくなき

さを志乃乃氏毛益

さをしかのうへにもまさる

入麻呂の為ると定家卿詠歌大概ね如此書ると雖然猶可尋之

秋茅子烏酢寸乗念

あきかやにすがるおもへば

我門介禁田平見着沙穂内之

わがかどにいさだをひらけさかのうち

境内心春日乎

さかひのうちにかすがをも

彼

かれ

2222 2223 2224 2225 2226 2227 2228 2229

詠河歌 一首 作者未詳

暮不去 河蝦 鳴 成 三和河之
おさそすや かえつなくありこころいその
清 瀬 音平 聞 師吉毛
きよきせをきくらむ

詠月歌七首 作者未詳

天 海 月 舩 浮 桂 桃
つめのうみつきのふねうけかつらかも
懸 而 榜 所見 月 人 壮士
かくこそゆつきひとおとこ
此 夜等者 沙夜 深 去良之 雁 鳴 乃
このよはさよふけぬらし雁鳴のね乃
歌聞 空 從 月 立 渡
きこゆるそらゆつきわたる
吾 背子之 挿頭之 芽子 介 置 露平
わかせこかかざしのはきに置つゆを
清 見世跡 月者 照 良思
さやかにとつきはてらし

万十 五十九

秋 月夜之物念 跡
こころなきあきのつきよのものとてや
寐 不宿 照 作 本名
いのねられぬにてりつつもらむ
不念 介 四良礼乃雨者 零 有 跡
おもはすよこれのあめはふれとあれと
天 雲 霽 而 月夜 清 伊去計 弖
あまくものきえてつきよのきよけくに
芽子之 花 開 乃平 入 緒 見代跡可鳴
はきのはなさくのをみよとかもなく
月夜之 清 戀 益 良國
つきよきよみこひまさらくに
白 露 平 玉 作 有 九月
しらつゆをたまになしたるくかつの
在 明 之月夜 雖見 不飽 可聞
ありあけのつきよはみれとあかぬかも

萩咲而 毛 有 雖 不 令 見 君 之 家 乎 思 曽 遣
はきさきてもあれはみせぬきみかいへをおもひそやらむ
所 念 人 乎 不 相 見 月 乃 徒 過 者
おもふひとをあはすつきのいたつらにすくしてまてば
天 雲 乃 外 従 雁 鳴 而 来
あまくものよそゆかりかねなきてきぬらし
吾 背子 乎 何 時 来 座 跡 加 月 見 乍 待 乎
わかせこをいつきますとかつきみつつまたむ
月 夜 見 乃 清 河 原 従 来 鳴 千 鳥 加 聞 者 乃 寒 夜 者
つきよみのきよきかはらゆきなくちとりかきけはのさよはは
安 倍 乃 島 乃 鳴 浦 鳥 夜 深 而 鳴 者 所 念 可 聞
あへのしまのなるうらとりよふけてなけはおもほゆへしも

萩の咲月を詠める歌七首

萩咲而 毛 有 雖 不 令 見 君 之 家 乎 思 曽 遣
はきさきてもあれはみせぬきみかいへをおもひそやらむ
所 念 人 乎 不 相 見 月 乃 徒 過 者
おもふひとをあはすつきのいたつらにすくしてまてば
天 雲 乃 外 従 雁 鳴 而 来
あまくものよそゆかりかねなきてきぬらし
吾 背子 乎 何 時 来 座 跡 加 月 見 乍 待 乎
わかせこをいつきますとかつきみつつまたむ
月 夜 見 乃 清 河 原 従 来 鳴 千 鳥 加 聞 者 乃 寒 夜 者
つきよみのきよきかはらゆきなくちとりかきけはのさよはは
安 倍 乃 島 乃 鳴 浦 鳥 夜 深 而 鳴 者 所 念 可 聞
あへのしまのなるうらとりよふけてなけはおもほゆへしも

詠風歌三首　作者未詳

戀作裳稲葉擽別家居者
こいはくるしいおそろしいおそろしいへみせそ
秋之暮風
こゝろくもの　あきかぜ
吾有秋之暮風
あきかぜ
萩咲有野邊日晩之
萩の花咲有野邊日晩之
秋風吹
秋風
あきかぜ
奈流共
なるとも
秋風吹
秋風
あきかぜ
鴨奈流共
鴨なるとも
秋山之木葉丈未赤者
秋山の木葉丈未赤
今且吹風者霜毛置應久
今且吹風者霜毛置
けさふくかぜは
けさふくかぜは
詠芳歌一首　作者未詳

高松之此峯迫尓笠立而
高松の此峯迫尓笠立而
盈盛有秋香乃吉者
盈盛有秋香乃吉者
今ちさりある秋乃くれよさ

詠雨歌四首　柿本朝臣人麻呂

一日千重敷布雲我戀
一日千重敷布雲我戀
妹當馬暮零礼見
妹當馬暮零礼見
こゝろかなしも

秋田苅廬入尓四具礼零
秋田苅廬入尓四具礼零
我袖沾干人無二
我袖沾干人無二
玉手次不懸時無吾戀
玉手次不懸時無吾戀
此具礼志零者沾作毛将行
此具礼志零者沾作毛将行
黄葉乎今落散四具礼能零苗尓
黄葉乎今落散四具礼能零苗尓

夜副衣すすも寒さむ一之宿者
よさくさむさひとりぬまこそ

詠霜歌一首　作者未詳

天飛也雁之翅乃霞羽之
あまとぶやかりのつばさにかすみはの
何處漏香霜之零異牟
いづこもりてか霜乃降らん

秋相聞

五首　柿本朝臣人麻呂

金山舌日下鳴烏
かなやまのしたひのもとになくからす
音闕何
こゑのたえざりしものを
誰彼我莫問九月
たれかわをなとふながつきの
露沾作君待吾
つゆにぬれつつきみまつわれを

秋夜霧發渡風
あきのよのきりたちわたるかぜのまに
夢見妹形矣
いもがすがたをみむとおもへば
秋野尾花末生靡合
あきのをばなすゑおなびきあひて
心依鴨
こころよりかも

秋山霜零葉落
あきやまのしもにこのはのおちまがひ
戚雖行我忘
うれはゆくとも我わすれめや

寄水田歌八首　作者未詳

住吉之岸乎田尓墾乃蒔稲乃
すみのえのきしをたにつくりまきしいねの
而不新公鴨
しねばかもかもぬきがてにする

劔後 玉緒 田井介 及二何時一可
しもの乃ふるさと乃ふるとしつゝ
人乃もとめもせぬ乃ミかは
妹平不相見 哀戀 将啓
こゝろをあらしすいへこゝろん
秋田之穂上介置 白露之
あきの田の穂の上を
可消 吾者叹 念鴨
けぬへくもわれはおもふかも
秋田之穂向之 坊依 片縁
我乃田乃ふるもけ乃ふるまてに
吾者物 念 都禮無 物乎
あるへきものをおもふまてに

秋 田叫 借庐作 五百人 為而
あきの田をかりほつくりいほりして
有藍 君 叫 将見 依 毛欲得
わかまつ君をいつとかまたん

鶴鳴之 聞 田井介 五百八為而
たつねてきませ山もとの
吾 客 有 跡 於妹 告 社
わかやとにはなしつけこそ

春霞 多奈引 田居介 廬 付而
秋田苅 左右 念恩
かりほ田のあたりおもほゆる
橘 平守部 乃五十戸之門田早稲
いちしるきやとりつかのまの
苅時 過去 不来 跡為等 霜
かるこゝろすきねこゝろす

寄露歌八首

作者未詳

秋 萩子之 開 散 野邊之暮露介
あきそきたちるのへたゝ露よ
沾作 来 益 夜者 深去鞘
ぬきしけゝまませよそよけぬし

色付相秋之露霜莫零
いろづきあきのつゆしもなふりそね
妹之手本乎不纏今夜者
いもがてもかれずこよひは
秋芽子之上尓置有白露之
あきはぎのうへにおけるしらつゆの
消鴨死惹
けぬべくおもほゆ
吾屋前秋芽子置露
わがやどのあきはぎにおくつゆの
市白霜
いちしろく
秋穂乎令押靡置露
あきのほをおしなべおけるつゆの
消鴨死益
けぬべくおもほゆ
吾恋目八方
わがこひめやも

露霜尓衣袖所沾而今谷毛
つゆしもにころもでぬれてけさのごも
妹許行而
いもがりゆきて
秋芽子之枝毛十尾尓置露之
あきはぎのえだもとをにおけるつゆの
消長命死
けぬべきまでに
恋不有者
こひずあらば

秋風之寒比来吾妹子者衣薄哉
あきかぜのさむきこのごろわぎもこはころもうすくやあるらむ

寄風歌二首

作者未詳

吾妹子者衣薄哉有南秋風之
わぎもこはころもうすくやあるもかあきかぜの
寒比来着益乎
さむきこのごろきまさるを

泊瀬風 潔 吹 三更者 及二何時
もつせ乃 かせの きよく ふくと いつまて
衣 片 敷 吾 一 将レ宿
ころも かた しき わ ひとりかも ねん

寄レ雨歌 二首 作者未レ詳
九 二
秋 芽子乎 令レ落 長雨之 零比者
萩の はきを ちらす ながあめの ふるころは
居而 戀 夜曽 大寸
一 おきて こひ よそ おほき

九月 四具礼乃 雨之
ながつきの しぐれの あめの

十 月 四具礼乃 雨 降
一云 かみな月 しぐれの あめ ふり

山霧 烟 寸 吾曽 誰平見者 将慰
やまきり けむ すら わそ たれかみれば なぐさめむ

寄レ蟋蟀(キリギリス)歌 一首

作者未レ詳

蟋蟀之 待 歡 秋夜平
きりぎりす まつる よろこ あきのよを

寐 驗 無 枕 與 吾 者
ぬる しるし なく まくら とも わ は

寄レ蝦(カハヅ)歌 一首

作者未レ詳

朝 霞 鹿火屋之下 尓 鳴 蝦
あさかすみ かひやの もと に なく かはづ

聲 谷 聞 者 吾 将戀(こひめ) 八 方
こゑ たに きけば わ こひ やは

相聞乃哥心又ハ旅庵乃ナドに次をくるべし燒をたきて
さめて或令狩衆敷ホ今云推鹿也然於鮫鹿者縱有兩義至于煙炎者有
可為一決 鮫鹿といふハ若燒乃洞陽ゐるべくる鮫鹿の山勝る廻る
ゐ不見ようにして彼哥りも相叶ふ故ま風林水山ゐ番須作乃
又敵ハ仲ハ蟹をゐ庵とゐ旅を男山より儀威宝家ハ二ゐを男い
作すをと奇特ゐ枝又奥儀ゐるハ加ゐ庵といハゐゐ魚ゐるとしてすること
ニ也とを八中浮物ゐし山家を仙覚ゐゐし山家を男い作り我ゐ二首
ゐりゐくい儀威て家ゐ赤ゐ浮のゐを男ますに有す祇註曰ばりい
ゐりゐのゐ六首ゐるとゐ山浮ゐも多くゐ古ゐれと云伝とゐてゐす私云
儀威乃伝を作て鹿火ゐ庵ゐ下ニ可云ちん哥の心ハ上十七字ハ序ゐて
聲ゐふさゐりなり並ゐゐ古ゐ哥のゐ田を作ル
者夜田を捨くハ秋と庵を作て鹿狩を追ふ夜ハ故きのゐめゐ燒を
焼ゐ哥山男ゐをれハ陸狩をさけ人げゐ好くゐたるまでゐく
へ一鹿ハゐとゐ彼燒と山さそふ庵ゐ一ゐ山中小里を離て

寄雁歌一首　作者未詳

出去者天飛雁之可汗羨
いてゐいなハのゐふりのゐきぬへゐ
且今且去今且二年曽經去家類
ふくとゐりゐらゐへゐ

寄鹿歌二首　作者未詳

左小牡鹿之朝伏小野之草若美
さをゐりゐあさふをゐ草わゐ
隠不得而於人
ゐくへゐわて人ゐとゐ

左小牡鹿之小野草伏灼然名
左小牡鹿之小野草伏灼然
ゐをゐ乃ゐ草ふしゐ灼然ゐ

吾不問尓人乃知良久
吾不問わゐをさゐる人乃知らく

寄鶴歌一首　作者未詳

今夜乃曉降鳴鶴之
このよゐ乃ゐりつきてゐくゐの

念不過戀許増益也
おもひいえすきてと立こゐゐれ

寄草歌二首 作者未詳

道邊之平花我下之思草
今更尒何千遍物可将念
いまさらになにをかおもはん

みちのへのたひらなるかにおくことのしけきおもひ
わかしたにして

序哥心鶴の子と
いひけるこゝろつまさきたちは昔より成りくしやいふすへなきものなれ
ともさすかに集歌の心をとりてよめるこゝ挽遺集伊勢大
輔なれ
るもろともにそたのむ雲の上の行すゑとをき松の
千とせを

千代六

寄草歌二十三首 作者未詳

草深三懸多鳴屋前
さとちかみすゝろにすゝろにきりくすなくあきの
萩子見公者何時来益年
もきこえそうきさよはいつきますらん
秋萩者水草花乃阿要奴蟹
いまさかりなるはきのはなのあへぬよ
思跡不知直尒不相在者
なりへとさしてこふあいされいかにせん
何為第加君平将厭秋萩子乃
おふすらきみをいとはん秋はきの
其始花之徹すゑ物平
ものをつゆのおくらす

仙兄は萩よ或は芽子とよめりこれ家の古説を用ひて寄草
とするおやの意へ
さるにてまりくすゝ
心哥

うまかけの
仙白秋萩の咲秋
る成ねれいなと云心
千葉の野一本二茎も
釋ふるこゝろ
中尾花をよめり
いねかてに
再心は秋いろて
此きこゝろ
花のおくらるゝに
おもひいるなり

展轉 戀者死 灼然
こひまろびこひしにしぬもいちじるく
色庭 不出 朝容貌之 花
いろはいでてあさがほのごと
言 出而云 忌深 朝貌乃
こといでていふことをいみ あさがほの
穗庭開 不出 戀 爲 鴨
ほにはさきいでてこひをするかも
雁 鳴之始音 聞 而開出 有
かりがねのはつこえをきくとともにさきいづる
屋前之秋 萩子 見 來 吾世古
やどのあきはぎのこをみにきわがせこ
[illegible]

[illegible] 初 尾花
[illegible]
何時如 妹之 將手花
いつのまにいもがてわかれむ
戀日之氣長 有者 三笠園能
こひるひのけながくあれば
辛 藍 花之 色出 尒來
からあゐのはなのいろにいでにけり
吾卿 尒 今 咲花乃 娘部呼敝之 女郎花
わがせこにいまさくはなの をみなへしかも
不堪 二 家里
えぬにいへりを
草子 花 咲有 平見 者君 不相
くさのはなさけるをみれば きみにあはず
毛 久二成 來 鴨
もひさになりにけるかも
朝露 尒 咲 酢左乾 奇 鴨頭草之
あさつゆにさきすさるつきくさの
日斜 共 可消 哉念
ひのくるともともにけぬべくおもへや

長夜平於君癒作座者
なりまきをそよこいたくいけすは
開而落西花有益平
さささくちりみだるよりもと
吾妹子亦相坂山之皮為酢す
わすもこまりまさるやまたものすくき
穂庭開不出癒渡鴨
なるいはきいてすこいまるもも
幸亦今毛欲見秋萩子之
いさるみよいまもみてう秋をきさ乃
四挽二将有妹之光儀乎
ちまいりいとうすると
秋萩子之花野乃為酢す穂庭不出
なきとをきさ乃花野のすさをふいそを

才一才二句はうなそとこいふん風雅しことりにはまは人きれぬ而之庭しも吹寒るもとなさるる
久くをすをきわりやとこのさき吹ふ梟あるかり里人とふいふ人をとるて
いるとりのよにも
仙台の歌も杜若也良鳥乃唱何すけいかにも
こりふ八重桜云ふるる万葉うつさきをしは
作物の後の可哀思をとれいそし

吾戀渡隠隠媽波母
わりこいわるこりにまをとし
吾屋戸亦開秋萩子散過而
実成及冊於君不相鴨
そよおるまてお君をねくし
吾屋前之萩子開二衆里不落間亦
わりやとりをさささふりちるぬまた
早来叫見平城里人
をやまくと見一ちるりさと人
石ゝ走間間生有猿花乃
いるりまくにおひるるの
花西有来在筒見者
をふあまくりのまてこれは
藤原故郷すきやと
わちりりりあり里れおきいまさ
開而落去す君待不得而
さささくちりみまこ君をちりて
秋萩子乎落過沼鉋手折持ちて
なまいまきをちりるねへみなりりて

雖見不怜君西不有者
それもさひしくおもほねハ
朝開夕者消流鴨頭草
かくさきゆくハかりそけきこの
可消戀毛吾者爲鴨
けぬへきこひにわれをする哉
蜻蛉野之尾花苅副秋芽子之
あきつのおとなかりそめにあきそさき
花平菅枝君之借廬
そなをものさねまくかりほに
咲友不知師有者黙然將有
さきねもせすハかくもあらんと
此秋芽子乎令視管本名
この秋さきをみせけるもとな

寄山歌一首 作者未詳

秋去者雁飛越龍田山
あきさらハかりこえゆくたつた山
立而毛居而毛君平思曽念
たちてもゐてもきみをこそおもふ

寄黄葉歌三首

作者未詳

我屋戸之甘菁日殊移久不色付奴
わかやとの山ゆかつら日ことにうつろひくれと色つかぬかも
不来座君者何情曽毛
きまさねきみはなにこころそも
足引乃山佐奈葛黄変及
あしひきの山さなかつら黄ばみて
妹介不相哉吾戀将居
いもにあはすやわかこひをらん
黄葉之過不勝兒乎人妻跡
もみちはのすきてしかねつまをとそ

そをもかはりそ
あきつのおとなかりそめにあきそさき
花平菅枝君之借廬
そなをものさねまくかりほに
咲友不知師有者黙然將有
さきねもせすハかくもあらんと
此秋芽子乎令視管本名
この秋さきをみせけるもとな

寄山歌一首 作者未詳

秋去者雁飛越龍田山
あきさらハかりこえゆくたつた山
立而毛居而毛君平思曽念
たちてもゐてもきみをこそおもふ

寄黄葉歌三首

作者未詳

我屋戸之甘菁日殊移久不色付奴
わかやとの山ゆかつら日ことにうつろひくれと色つかぬかも
不来座君者何情曽毛
きまさねきみはなにこころそも
足引乃山佐奈葛黄変及
あしひきの山さなかつら黄ばみて
妹介不相哉吾戀将居
いもにあはすやわかこひをらん
黄葉之過不勝兒乎人妻跡
もみちはのすきてしかねつまをとそ

雖見不怜君西不有者
それもさひしくおもほねハ
朝開夕者消流鴨頭草
かくさきゆくハかりそけきこの
可消戀毛吾者爲鴨
けぬへきこひにわれをする哉
蜻蛉野之尾花苅副秋芽子之
あきつのおとなかりそめにあきそさき
花平菅枝君之借廬
そなをものさねまくかりほに
咲友不知師有者黙然將有
さきねもせすハかくもあらんと
此秋芽子乎令視管本名
この秋さきをみせけるもとな

見作 哉 將有 戀敷 物平
又ひとりやねんこひしきものを

寄月歌 三首 作者未詳

於君 戀 之奈要痛 觸 吾居者 吹而月 斜 傷
秋風 秋乃夜乎 長跡雖言 盡 者 短有 家里
さよふけてこの秋風の吹くなへに月かたぶくを
あかずもあるかな

祇日左倍 人乎 目 見 者 戀 物平 仙日左倍
かくばかり人をめに見て恋むやは仙日さへ
ひとりぬる夜は

或云 物 者 思 物 曰 或云 者 思 物 曰
物をこそ思ふといへ思ふ物をとよめるもよし

秋夜之 月 疑意 君 者 雲隠
あきの夜の月うたがひきみはくもがくれ

須臾 不見 者 幾許 戀 敷
しばしだに見ねばいくばくこひしきを

九月 之 在明 能 月夜 有作毛
ながつきの有明のつきよありもせな

君 之來座 者 吾 將戀 八方
きみがこむ夜は我こひめやも

寄夜歌 三首 作者未詳

忍咲八師 不戀 登爲跡 金風 之
しのえやしこひじとすれどこがねふく

寒 吹夜 者 君 乎之曽 念
秋の夜はきみをぞおもふ

感者 之 痛 情 無跡 將心念
わびしくもあるかこころをなぐさめむ

秋之 長夜乎 寐 師 耳
あきのながよをねしのみ

秋夜半 長跡雖言 積 西
秋乃よをながしとはいへつもりぬる

戀 盡 者 短有 家里
こひをしつせばみじかくありけり

寄夜歌 一首 作者未詳

2304 2305 2306 2307 2308

秋のはの色あるしと
積し意の粧をいひ
てきんとすれハ秋
の事也ハてらすらく
あきつハよ匂へる

秋都葉尓 尓寶敝流衣 吾者不服
あきつはに にほへるころも われはきし
於君奉者 夜毛着金
きみにまつらせハよるもきるかね

仙曰秋はとハ蜻蛉也あきつとふをあつまのりえ
えぞとらしえいあきと赤ねとなるしされハあきつはに匂へると之
るハあけ乃意也 玉東頒 和名云赤卒一名絳騮蜻蛉之小而赤也よ
こせハイまとさハイまつハ皆同奉らえしけまつえりまゐるうつき
衣をぬハきみすて君のまゐらせハよるもきるそ何人さあかハ粧
多せんとなり也一説あきつりんをきゝらのの ミくあり
しひきすしひもとく
様ねハさみうきゝれと
それも綴うくまゝ何る
と我ハ口舌為て
もちきまゝを独ねると之
忘られするあかつき

問答歌四首 作者未詳

旅尚 襟解 物乎 事繁
たびにすらひもとくものを事しけみ
丸宿吾為 長此夜
まろねわがするながきこのよを

四具礼零 暁月夜 紐不解
しくれふるあかつきつくよひもとかず
戀君跡 居益物
こひしき君とをらましものを

恋しき君と二人ある
つき物とくせかうるそ時
雨の暁月夜よもひも
とかすねるとなり此二首
問答のうたなり

於黄葉 置白露之 色葉二毛
もみちはにおくしら露のいろはにも
不出跡念者 事之繁家口
いでじとおもへハことのしげけく

もみちそにおく
白露のいろの葉ハ物
字也やしけくのけ
物字とも此寄一二句え
色に出じといふん諷刺
也色にも人に知られまじとこハ事はやくて思ひつもりさし事しけ
みまろねはれする 此歌をと思ふりなるなり

雨零者 瀧都 山川 於石觸
あめふれハたきつ山かハいはにふれ
君之摧 情者不持
きみかくだかむこころハもたじ

此一首不類秋歌而以和載之也

あめふれハたきつ山河 上句ハきミさんといふん諷刺也 といつハおもひすぎる
思ひ寄るハ君か心ハをちまりし我こころかわりて心まうけと之時
色よる何つきときしよめるうつる意へあるべし
此一首不類秋歌 此句時雨よる景に取とハ秋の頃と

和の奇ク丸ニ示ス哉と
乃至ラ二一

警喩歌 一首 作者未詳

そみちからいくら山社の　祝部等之齋経社
仙日神ろの祝ひ清る　標縄越而落
神の社乃ちめのうち　之黄葉毛
ある和禁ともろう　去物乎
我もろう生ぬれハ人乃いさともも　ちすゑあもちへいろんとそ
みーちゃも

旋頭歌 二首 作者未詳

きりくすわうゆの　蟋蟀之吾床隣介鳴乍本名
そ逢ーに共もねれねなきりくすの我　起居管君介戀介宿不勝介
家のりもようもく　おきみつくきそよ逢ふいのねられぬふ
吟ていこうねさせ　皮為酢寸穂庭閑不出戀平吾為
そ詩七月篇お誰　玉鯖直一目耳視之人故介
志のすきろなきろ　ひけろみのくー日のそくーひとゆーな
皮為ハろなぬねり

祖行くひけろふハ陽炎ろ春天り出ろれハ一日乃ちの松祖ろ一めろ
人故心の中小逢ーそ

冬雑歌 春雑哥ホ
ろ月心そのをく
乃哥ひめ

冬雑歌 四首 柿本朝臣人麻呂

わうそてふれ　我袖介電手走ク巻隠
ふれを神の里に居　不ン消けすもあり見
してゆさすもは　妹為
も至ろ手走ハ飛走ろ　足曳之山鴨高巻向ク也
ひさ乃山も　木志乃子松二三雪落来
おきり八雪の大　巻向之檜原毛未ニ雲居者
和ろ雪の四方の　子松之末由沫雪流
小松ろ雪ろ降て　こもりのすゑあそゆきろ
山のさきごゆも
まきこくりひく

祇泊云ふ考古今ふハこれこもろもろ春の部ふ入ゆ

詠雪歌九首 作者未詳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吾袖尒零鶴雪毛流去而
妹之手本伊行觸糠
沫雪者今日者莫零
袖纏将手人毛不有悪
甚多毛不零雪故言多毛
天空者隠相管
吾背子乎且今且今ばかり出見者
沫雪零有庭毛係杼呂尒
足引山白者我屋戸尒
昨日暮零之雪疑意

詠花歌五首　作者未詳

誰苑之梅花毛久堅之
清月夜尒幾許散来
梅花先開枝手折而者
誰常名付而典副手六香聞
誰苑之梅尒可有家武幾許毛
開有可毛見我欲左右手二
来可視人毛不有二吾家有
梅早花落吉
雪寒三咲者不開梅花

縦北來者然而毛有金
うこともさそしかるうね

詠露歌一首　作者未詳

為妹　未枝　梅半手折　盤陂
いもりこめかすもとりうめをこれ
下枝之　露介　沾　家類可闇
ちけえりけゆまぬまくるうも

詠黄葉歌一首

作者未詳

八田乃野之淺茅色付有乳山
峯之沫雪寒
みねのあそゆきさむくふるらし

詠月歌一首　作者未詳

左夜深者出來牟月乎高山之
さよふけてこんきをたかやまの
峯隠鴨
みねかくれかもつきをまつらん

冬相聞

二首

雫雪乎布流　虚空可消　雖戀
るまでとうそらにけぬべくこふれども
相依無而月
あふよしをなみ

經古奴礼在
ふるなれる

沫雪千里零敷戀為來
いもがりとちさとふりしきてこいか
食永我偲
けるくわれをしのふらん

寄露歌一首作者未詳

咲出照梅之下枝置露之
ちきでるうめのしたえをつゆの
可消於妹戀頃者
けぬくいもにこふるこのころ

寄霜歌一首 作者未詳

甚毛(も)夜深(ふけ)行道邊之湯小竹(ゆざさ)之於(に)霜夜禹(よは)毛(も)乃(の)ふりさえわたるかも

寄雪歌十二首 作者未詳

小竹(ささ)葉(は)介(に)薄太礼(まだら)零(ふる)雪(ゆき)消名羽鴨(けなばかも)

佐(さ)寐(ね)乃(の)夜(よ)者(は)毛(も)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

霰(あられ)打(うち)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

霰(あられ)打(うち)落(ふる)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

吹(ふく)風(かぜ)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

寒(さむき)夜(よ)也(なり)

旗野(はたの)介(に)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

今夜(こよひ)吾(わが)

獨(ひとり)寐(ぬる)哉(かも)

吉名張(よなばり)乃(の)野木(のき)介(に)零(ふる)霰(あられ)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

白雪(しらゆき)乃(の)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

霜(しも)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

鴨(かも)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

吾(わが)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

一眼見之人尓戀良久(ひとめみしひとにこふらく)天霧之(あまぎらし)

零來雪之(ふりくるゆきの)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

可(べく)消(けぬ)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

思(おもい)出(いづる)時者(ときは)為使無(すべなき)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

豊國之(とよくにの)

木綿山(ゆふやま)雪之(ゆきの)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

可(べく)消(けぬ)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

如一夢(いちやめの)

見而(みて)天霧之(あまぎらし)

君乎相(きみをあひ)

落來雪之(ふりくるゆきの)

可(べく)消(けぬ)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

吾(わが)背子之(せこが)

愛(うつくし)

出去者(いでてゆきしは)

雲引(くもびき)

雪(ゆき)

(所)念(おもえ)

(特)忘(わすれ)尓(に)念(おもえ)哉(や)

梅花(うめのはな)

其(それ)

疑毛(かとも)

不所見(みえぬ)

零雪之(ふるゆきの)

市白(いちしろく)

誰(たれ)

人(ひと)

間使(とひつかひ)

遣(やる)

一云　ふる雪のまつはしやかれしらんな　（零雪介間使遣者其将知名）
ちゝ首可消ニ可心月
わらせこかことうつゝみ
ことうつゝみハ事うるうきと同しはかきこゝとひきしもあんとハ雪
ゆへハとすらひく時つくに人いまえんに雪隆らるゝ通るるを思ふや
うめの花されともえさと上句序也此雪の体をやいハ揭て云事にふりかゝと
同体ハ只体也一云も同也

2345
天霧相　零来雪之　消友　於君合常　流經渡
あまきらひふりくる雪のきゆれとも君にあはんとなからへわたる
天きらハ天小村く陰也
一二句ハ序也三句消れとも
わか君をあはんとなかれへて

2346
窺良布　跡見山雪之　灼然　戀者妹名　人将知可聞
うかねらふとみる山雪のいちしろく恋ハいもか名ひとしらんかも
うかねらふとみる山をいはん詞
也とみる山ハ同前對るき
うかねふとみる山雪の

2347
海小船　泊瀬乃山介　落雪之　消長戀師　君之音曾為流
あまをふねはつせの山にふる雪のけなかくこひしきみかおとそする
あまをふねをつせの上句ハけ乃字をいはん序也時にてまつる君かゝま

2348
和射美能　嶺往過而　零雪乃　厭毛無跡　白其兒介
わさみ野のみねゆきすきてふる雪のいとひもなしとまうせそのこに
するとへの言傳を頼也
わさみのハみねゆきすきて
わさみのゝ嶺越えて来る雪を
悩しきを上句に語て
こち女子ハうとましからぬを
いひしらせよとや

寄花歌一首　作者未詳

2349
吾屋戸介　開有梅乎　月夜好美　夕夕令見　君乎社待也（一云社待也）
わかやとにさきたる梅をつきよよみよな〳〵見せん君をこそまて
わかやとにさきたる梅をと
社待也（コソマテ）一社待也（コソマツヤ）とも読

寄夜歌一首　作者未詳

2350
足檜木乃　山下風波　雖不吹　君無夕者　豫寒毛
あしひきのやまあらしのかせはふかねとも君なきよひハかねてさむしも
あしひきの山下風ハ
いねてとふ羽を憐る
山風ハ吹ねとも独ねる
夜ハ風なくもさむきを
うろさく悲しきを
かくいひて也

萬葉集巻第十

貞享三年丙寅二月十二日書于新玉津嶋寶前　墨付七十七枚　季吟